

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

し わす
師 走

平成28年12月第3週放送

十二月のことを別名「師走」と言います。よく知られている言葉ですが、その由来にはいまだ定説がありません。

奈良時代や平安時代の文献には、十二月の異名として平仮名で「しはす」となっているものがしばしば見られ、元々は「しわす」ではなく、「しはす」であったようです。

「し」とは“年”のことで、「年が果てる」という意味だとする説があります。また、「し」は“仕事”、為すべきことの意味であり、やらねばならないことの区切りだとする説もあります。一方、「はす」については、“果てる”、“終わる”という意味のようです。

私たちがよく目にする「師走」という漢字も、いつ頃から使われ始めたのか定かではないようですが、江戸時代の頃からだという説が有力です。

とりわけ、「師」を指すものが、勉強や学問を教える人、特に昔は儒教の先生を指すという説や仏教の僧侶を指すといった説などがあり、一定していません。この中で仏教の僧侶が忙しいとされるのは、大掃除や新年の準備のためというよりも、その年の厄難を祓い清めて新年を迎えるために、年の瀬にご祈祷をしまわったという習慣が基になっているようです。

いずれにせよ、漢字の「師走」が意味するところは、“師”が“走”りまわる程の忙しさであるということでしょう。

そもそも、日本人の多くは「お忙しいようで」と言われることをあまり否定的には考えません。これに対して忙しいことはむしろ不幸なことだと考える方々もいるでしょう。背景には、日本人が神仏や自然からの恵みを頂いていることを身近に感じながらできてきた労働観と、『聖書』などに代表される神から与えられた試練としての労働観の違いがあるのかもしれませんが。

“師”に限らず、十二月は確かに忙しい季節です。年の変わり目であるお正月を迎える前にやらなければならないことにある程度目途をつけ、新たな気持ちで新年を迎えたいという思いはとりわけ私たちの内には強くあります。

しかし、「忙しい」という漢字は“心”を“亡くす”と書きますし、「忘れる」という漢字も同じ意味です。いくら忙しいからといって忘年会にかまけて心を亡く

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

してしまうことは望ましいことではありません。

仏教では、常に自らの今の^{ころ}心 に気を付けてつ時を過ごすことを大切にしています。この「師走」^{しわす}の時期、自分の“今”の“心”にきちんと向き合うと書く「念」^{ねん}という漢字を大切にしたいものです。

— 終 —